

中学校での夜間適応指導教室活動における大学院生のスタッフとしての体験報告と考察

栗脇, 開世
九州大学大学院人間環境学府

竹並, 里紗
九州大学大学院人間環境学府

内山, 夏希
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/7177935>

出版情報 : 九州大学総合臨床心理研究. 15, pp.157-162, 2024-03-15. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

中学校での夜間適応指導教室活動における大学院生のスタッフとしての体験報告と考察

栗脇開世 九州大学大学院人間環境学府 / 竹並里紗 九州大学大学院人間環境学府 / 内山夏希 九州大学大学院人間環境学府

要約

不登校児童生徒数は増加しており、様々な取り組みが行われているがその中の1つに適応指導教室がある。適応指導教室の活動は主に日中に学校外で行われることが多いが、筆者らがボランティアスタッフとして参加する適応指導教室は夜間にA県のB中学校内で行われている。本臨床体験報告では、B中学校での夜間適応指導教室の設立までの経緯と、設立当時の活動と現在の活動について文献や設立に携わった方々に伺ったお話を元にまとめた。そして、本教室での活動についてコミュニティ心理学・地域支援の視点から考察した。加えて、スタッフとして1年以上参加する大学院生が、活動に参加した体験に関して各自で記述し、夜間適応指導教室の活動に参加する大学院生側の意義についても考察した。その結果、夜間適応指導教室の活動は設立当初と現在では形態が異なる部分が存在していた。また、本教室は夜間・校内で実施される特徴のほかに、学校・心理・地域の3方向から支えられ維持されているという特徴があり、生徒・スタッフ両者にとって安全な環境の中で、心理臨床について学べる場であることが考えられた。

キーワード：適応指導教室、不登校支援、コミュニティ心理学、地域援助

I-1 問題と目的

不登校児童生徒数は増加傾向にあり、文部科学省(2022)の調査によると不登校児童生徒数は小学生・中学生・高校生合わせて約29万人と過去最多となっている。在籍者数に対する割合で見ると、小学生・高校生は約1%である一方、中学生は5%と最も高い。また、適応指導教室の在籍者数は、学年が上がるほど増加することが指摘され、特に小学校6年生から中学校1年生の生徒数の増加が顕著である(文部科学省, 2019)。このことから中学校における不登校生徒に対する支援が特に重要である。

不登校児童生徒への支援として、様々な取り組みが行われているが、その中の1つに適応指導教室がある。適応指導教室とは、不登校児童生徒等に対する指導を行うために教育委員会及び首長部局(教育委員会)が、教育センター等学校以外の場所や学校の余裕教室等において、学校生活への復帰を支援するため、児童生徒の在籍校と連携をとりつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等を組織的、計画的に行う組織として設置した、教育相談室のように単に相談を行うだけの施設は含まないものを指す(文部科学省, 2019)。適応指導教室は全国に1295施設あり(文部科学省, 2019)、その活動は日中に行われることがほとんどである。加えて、適応指導教室は通常、学校外に設置されており、生徒の生活の場から離れているため、子どもとうまく繋がらないことも多い(姫島, 2016)。一方、筆者らが学生ボランティアスタッフとして通うA県のB中学校での適応指導教室は、夜間にB中学校内で行われている。この活動は約27年前、B中学校で始まり現在も続いている。このB中学校での夜間適応指導教室の活動は、いくつかの文献で取り上げられており、夜間に行うことについて参加する子どもの立場からの考察や、執筆時点での活動形態に関してまとめられている(姫島, 2016; 大原, 2021)。しかし臨床心理学を学ぶ大学生・大学院生がスタッフとして参加した体験に関しては未だ扱われていない。加えて、活動形態をまとめた姫島(2016)から約7年経過しており、現状の形態について改めてまとめる必要がある。

そこで本臨床体験報告では、まず、B中学校の夜間適応指導教室活動について成立までの経緯と現在の活動形態を、設立当初の形態が記載された姫島(2016)と比較しながらまとめる。

その中で、B中学校での夜間適応指導教室の活動についてコミュニティ心理学や地域援助の観点から考察する。そして、1年以上夜間適応指導教室の活動にスタッフとして参加した大学院生が、活動の中で学んだことを各自でまとめ、スタッフにとっての本活動の意義に関して考察を行う。

I-2 方法

現在の形態は、現在通うスタッフがまとめる形で記述する。設立当初の活動形態や当時の状況は、姫島(2016)を参照する。加えて、設立に携わった田嶋誠一先生、地域協力委員のC氏にお話を伺う。また、スタッフに関わる機会の少ない親の会に関してもC氏に伺う中でまとめる。加えて、1年以上参加した学生スタッフの学んだことは本論文執筆にあたり各自で執筆した。

II-1 夜間適応指導教室の設立経緯

設立当時の1997年、B中学校の校長の設立の発案を受け、当時スクールカウンセラー(以下;SC)として勤務していた田嶋先生、当時のB中学校校長、生徒指導の先生、C氏が中心となり活動が始まった。発案当初は田嶋先生がそれ以前に行っていた他の居場所活動から、昼間に行おうとしていたが、不登校生徒の意見や田嶋先生の「昼間は他の生徒がいるから来られないというのなら、夜に教室をやれば来られる生徒もいるのではないか」(田嶋, 2005b)という発想から、夜間の学校内に生徒が通える場が設けられた。設立時、田嶋先生、B中学校校長と生徒指導の先生が、不登校の子どもたちの家を回り、保護者に活動について伝えた。田嶋先生は、この活動を学校の責任で行うことや、不登校児童生徒の家を回ったことにより、学校の本気度が伝わったのでは、と振り返っておられた。

II-2 設立当初の活動と現在の活動の比較

本教室の活動について、項目ごとに姫島(2016)にある設立当初と比較しながら記述する。

II-2-1 参加者

設立当初	現在
私服での登校が認められ、参加すると出席扱いとなる	
不登校生徒約10名のうち、他県において参加が難しかったり、部屋から出ることができなかつたりした2名を除く、ほぼ全員。多い時で15名程。	人数は不定期だが、6~10名。1年生が1名、2年生が4名、3年生が1名所属。卒業生が活動に参加することも多い。

本教室に生徒が参加する流れを以下に述べる。まず不登校状態となった際、担任が本活動を保護者と本人に紹介し参加の意向を確認する。参加を希望すると代表のC氏が保護者と本人に面談を行い、ルールや登下校の時間、配慮事項の確認を行った後に入級となる。また、きょうだい本教室に通うことから、小学生の頃から参加する例や、民生委員や校長の紹介で入級する例もある。

II-2-2 参加するスタッフ

設立当時	現在
交通費はB中学校から支給	
臨床心理学を学ぶ九州大学の大学院生、学部生や地域の大学院生。活動に通う生徒の保護者と顔見知りで、自身も元保護者だった地域の方。田嶋先生がSCとして親の会に参加。	九州大学大学院で臨床心理学を専攻する修士1年・2年生が参加。SCは活動に参加していない。月に1度、指導教員によるグループスーパービジョン（以下：GSV）を受け、困っていること等について相談する機会がある。

II-2-3 実施場所と設備

活動が行われる部屋は、一般的な教室ほどの広さで、個別相談用の小さな個室が設えてある。

設立当初	現在
実施場所：基本的にSCが使用する教室。部屋内の個室は人数の多い時は男女や学年でのすみわけに用いられることがあった。 設備：教員の許可を得た上で自由に使うことができ、活動の内容に合わせて体育館や武道場、パソコン教室を借りた。(姫島, 2016)。	実施場所：SCが使用する教室と体育館※個別相談用の個室は使われない 設備：SCの教室のものは自由に使うことができるが、体育館ではSCの教室に置かれているボール等を持参し、自由に使うことができる。

II-2-4 各回実施スケジュールについて

設立当初	現在
下校に関して安全性の確保の観点から、基本的に女子生徒は保護者と一緒に帰宅することになっており、男子生徒も自転車での通学が許可されている。加えて、C氏から地域の方へ本教室の活動について説明がなされており、地域全体での見守りが行われている。	観点から、基本的に女子生徒は保護者と一緒
毎週水曜日と木曜日の19:00から21:00に実施。 活動の中で、生徒に合わせた学習指導が行われることもあり(姫島, 2016)、活動は生徒の希望を反映していた。田嶋先生によると最初は教室だけの活動だったが、生徒が体育館も使いたいと希望したことで、体育館でも活動が行われるようになった。 BBQやカレー作りなどの調理を、参加する生徒や教員スタッフ全員で行ったり、お別れ会などを実施したりしていた。	毎週木曜日19:00から20:15に実施。 19:10頃まで教室でカードゲームやおしゃべり等。 19:10頃~19:50頃まで 体育館へ移動しボール遊び、おしゃべり等。 (教室で過ごしたい生徒がいる場合は、スタッフが一人以上付き添い、教室で過ごす) 19:50頃 体育館のモップがけをし、教室へ移動。 スタッフから生徒へラムネや館を配る 下校時の挨拶をスタッフから生徒1人に依頼。 生徒帰宅後、21:00までにスタッフが現役生の今日の様子や担任に共有したいこと等を記録として記入。記録には後日読んだ担任からコメントが返ってきたり、夜間の活動以外の様子が共有されたりする場合がある。

近年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以前よりも短い時間で実施されている。

現在の年間スケジュールについては以下のようになっている。

4月：1学期始業式（開級式） 7月：1学期終業式 8月：2学期始業式 12月：2学期終業式 1月：3学期始業式 3月：卒業式・修了式

設立当時から、始業式や終業式では、校長や教頭が出席し、講話を行なっていた(姫島, 2016)。

II-2-5 活動について

設立当初	現在
教室：トランプ、ボードゲーム、五目並べ等。 体育館：バドミントン、バスケット等。 学習指導：前半30分などと時間を決め、それぞれの生徒にあった課題が行われていた活動についてもプログラムなどは決めず、流れも行いながら決まる部分が多かった。	教室：スマートフォン（以下：スマホ）を触る、おしゃべり、トランプやUNOなどのカードゲーム、ジェンガ等。 体育館：バスケやバドミントンの中当て、フリスビーなどの体を動かす遊び、舞台上に座りスタッフや生徒同士で話したり、教室から持参したカードゲームで遊んだり、スマホを触ったり等。

II-2-6 参加する生徒の様子について

設立当初	現在
初回はコミュニケーションがスタッフと個々の生徒との間にわずかに生じる程度でなんともしめやかな雰囲気ではなかった(田嶋, 2005b)。当初は、生徒とスタッフ間の個別で、スタッフが気を回して話す、双方向的でないやり取りが多かったが、緊張した様子で来始めた生徒が様々な活動を継続する中でゲーム中に歓声を上げ、動きが活発になっていった(姫島, 2016)。普段の活動や行事で仲良くなった生徒同士で、昼間に出かける様子もみられ、生徒同士の繋がりや関係性の深まりがあった。(姫島, 2016) また、教員は鍵の開閉を主に行っていた。	主に男子生徒がスポーツをすることが多く、女子生徒は体育館のステージに座り、生徒同士やスタッフと、アイドルやキャラクター等、好きなものについて話して過ごす。また、生徒は活動中やその前後で担任の先生からプリントをもらったり、担任と話をしたりしている。

II-2-7 昼間の活動について

B中学校では、夜間の教室に通えるようになった生徒の次のステップとして昼間の活動も実施されている。それまでの夜間の活動と学級との橋渡しをよりきめ細やかに行うことを目的に、開設数年後から水曜日の活動が昼間に行われるようになった(姫島, 2016)。

設立当初	現在
毎週水曜日の13:30から15:30 主に進路決定にあわせた勉強面の活動や面接練習が行われている。	
生徒が昼間にも来室することでクラスの友人と接する機会が増えたり、学校行事に参加したりなど、生活の幅が広がったり、クラスへ通う生徒がみられていた。また、昼間のみの参加から、夜間の活動にも参加するようになった生徒や、使い分けて通う生徒もいた。個々で勉強をするだけでなく、校長の呼びかけで教職員が来て、理科の実験などをする事もあった。昼間の活動にもスタッフが参加することがあった。	生徒や卒業生が進学する高校の受験に向けた勉強をしている。加えて、通信制高校の校長が作成した、様々な仕事に関する動画配信が行われ、職業体験に近い行事が行われることもある。学生スタッフは現在参加していない。

II-2-8 親の会について

設立経緯について、C氏によると、不登校の保護者向けに現状を伝える保護者会はあったが、保護者を一人にせず、保護者同士で話せる場を作ろうとC氏が中心となり設立された。

また、現在、親の会実施日以外の日にも、夜間の教室活動が行われる間、保護者が自然と集まって話をしていことから、親の会をきっかけに保護者同士のやり取りや、学校への要望を話すことにもつながっているようである。

設立当初	現在
月に1回行われている。	
田嶋先生は親の会に、保護者から相談された際に相談にのるような立ち位置で参加をされていた。また当時から、親の会では臨床心理士などの専門家を招き、講演会が定期的に行われていた。また、現在は自治体の単位で行われている通信制・単位制高校の見学を、車で実際に見に行くという形で行っていた。	臨床心理士や通信制高校の校長、大学教員による講演会や、6月と7月に通信制・単位制高校の説明会・見学会が行われている。これらに加えてかつて夜間の活動に参加しており不登校状態だったが、現在は進学している子どもを持つ保護者を招き、話をしてもらう機会も設けられている。

II-3 スタッフとして参加する大学院生各自の体験報告

次に、各スタッフが夜間適応指導教室に参加した体験について以下に記載する。

栗脇開世

私が本教室の活動に参加したのは、現在所属する専攻に入学してすぐの頃だった。参加した当時、私は不安と緊張を強く感じていた。その要因は主に2つある。1つ目は、不登校生徒との接し方についてわからないことが多かったからだ。当時、私は不登校児童と関わった経験がなく、どう接していいかわからなかった。本活動は、大まかな流れは決まっているが、詳細な活動までは決まっておらず、生徒が自由に過ごせる活動だったので、余計わからなさがあつた。2つ目は、場所としての要因だ。本活動が行われるのは、私自身初めて行く場所であり、加えて私達スタッフが外部の人間となる中学校でもあるため、学校の一員ではない自分の、学校の中での振る舞い方がわからなかったことも大きかった。GSVでは、自分がどう接したらいいかわからないことばかり相談し、生徒の日々の様子まで目が行かなかった。

そのような、どうしたらいいかわからない中で本教室の活動に参加し生徒と関わる中で、私自身にとって重要なことを2点学んだ。1点目は、自分自身の状態に気づくことについてだ。本活動に参加した当時、私はどんな話なら子ども達を傷つけないかが気がかりだった。GSVの際に一般的な世間話から始めることを提案され、それを毎回参加する生徒と続ける中で、私自身が本活動の場に慣れていった。その中で、不安に感じている自分の要因が大きいことに気づいた。今振り返ると自分自身の中の不安感を、生徒が感じていると投影して捉えていた部分もあると感じた。それ以降は徐々に生徒の今日の様子や調子等にも注意が向くようになった。このことから、まずは自分自身の状態に気づくことの重要性を実感した。加えて、安心して過ごせる場を作るためにまずは自分自身がその場で安心して過ごしていることが重要であり、その意味でも自分自身が場に慣れることが大切だと学んだ。2点目は、モノを介したやりとりについてだ。参加した当初の私は、世間話をするに加えて、活動の中で体育館に毎回行き、毎回来る卒業生と一緒にバスケットボールをしていた。何か話をしなくてはと感じていたが、バスケを通じて少しずつその卒業生と距離が縮まり、その後徐々に話しやすくなった。このことから話すだけがやりとりではなく、非言語的なやりとりや、モノを介したやりとりで関係性を深めることの重要性についても学んだ。これら2点を通じて、関係性の作り方について体験しながら学ぶことができた。現在はこれらに加えて、枠が無い中で悩みごとを扱う難しさについても活動を通じて実感している。大学院付属の相談室での担当

ケースとは異なり、本活動は生徒とスタッフが1対1ではなく、臨機応変な対応が求められる。その中で、参加する生徒一人一人の相談をどう扱っていくのが難しいと感じた。また参加するスタッフの人数によっては生徒一人と関われる時間も日によって異なる。今後現場で働き始めるとそれぞれの職場で様々な役割が求められるだろう。活動の中で、個々の相談があった際どう扱うか等、今後も学んでいきたい。

竹並里紗

私が学生スタッフとして参加する中で、心理臨床における多くの学びを得ることが出来た。まず、私が関わり始めた時期は、専門職学位課程1年生の5月頃で、まだ心理臨床での実践的な経験がなく、不登校の子どもたちと関わること自体初めてだった。そのため、最初は振る舞い方が分からず、先輩方にアドバイスを貰いながら、徐々に本活動の場に慣れていった。私がスタッフとして関わる中で学びとしては、実際に子どもたちと関わる中で、話すときの適切な距離感や話題などに関することが1番大きい。子どもたちの中には対人距離が近かったり、遠かったりと様々な子がいる。最初は、子どもたちの反応を見ながら物理的な距離感、心理的な距離感を測っていた。話す話題も、子どもたちの背景についての情報がなく、どのような話題がタブーなのか、これは少し積極的に話し過ぎたかなと探り探り話していた。そのような自分の振る舞いに対して、GSVのときに振り返ったり、先輩方から助言を貰ったりする中で、自分の行動を客観的に見ることができ、実践的な学びが深まっていった。また、スタッフという自分の立場を意識した関わり方という部分でも難しさを感じた。先生でも友人でもなく、スタッフという特殊な立場で、子どもたちと関わっていると過ごす時間が長くなるにつれて、距離が近くなりすぎていると感じる時があった。以前、生徒から連絡先を交換したいと言われたことがあった。もしその子と私が友人であれば、何の迷いもなく、連絡先を交換していたと思うが、あくまで私はスタッフであり、本活動に通う生徒と個別に連絡を取ることは禁止されているため、断らざるをえなかった。現在でも学生スタッフの立ち位置について考えることがあるが、生徒と先生がタテの関係なのだとしたら、スタッフはその間に入るナナメの関係なのではないかと思う。ナナメの関係にある立場だからこそ、生徒が話せることができ、一定の距離を保ちながら話を聞くことができていると感じる。今後も、自分の振る舞いが生徒の目にどう映るか、自分は生徒にとってどんな存在なのかを考え、生徒と関わっていききたい。そして、このように私が生徒と関わることはできるのは、本活動の運営に携わる先生方、地域支援協力員の方や保護者の方々のお力添えがあるためである。生徒にとって大切な居場所である本活動を今後も守っていけるよう、スタッフとして尽力していきたい。

内山夏希

本教室での学びを記すにあたり強調したいのは、活動の独自性である。本活動は他の生徒が帰る夕方から夜にかけてあることから、学校という日常の場所でありながら非日常的な空間になる。生徒が過ごす空間にスタッフが入り、複数のスタッフと複数の生徒が関わりをもてるというのは、生徒がカウンセリングルームに来ることも、スタッフが家庭に訪問することも

違う意味合いがある。さらに学校に来ていながらも私服でいい、スマホを操作してもいい、勉強を強制されない、スタッフや卒業生といった外部の少し年齢が上の人たちと関わることができるなど、様々な独自性がある。これは学校という場所に馴染むための一歩であり、他者とコミュニケーションをとるための練習を積み重ねることにつながると考えている。また、生徒が来始めた頃はスタッフと1対1で話し、どう過ごしていいかわからず静かにしていたが、徐々に元気になっていき、場合によっては複数人での活動や他の生徒との関わりができるようになることもある。本活動は1つの空間にセラピストとクライアントが2人で世界を共有する個別セラピーとも、プログラムを通して他者と関わっていく体験を積む集団セラピーとも異なる。自由な空間の中でしたいことをする、という過ごし方を自分で選び、決めていけるようになる過程で、自分のあり方を選んでいく、決めていく練習の場になっていくのではないかと考えている。

私自身がスタッフとして活動していく中で学んだことがいくつかある。1つ目は生徒との距離の取り方の難しさや自己開示の線引きの難しさである。先輩スタッフから「年上のお兄さんお姉さん、友だちみたいなかんじで」と言われ、私自身が初学者であったこともあり、距離の取り方を誤ったことがあった。本活動自体の雰囲気も柔らかく過ごしやすいものであるため、つい距離が近くなりがちだが、あくまでも生徒たちを気にかけるナナメの関係性であるスタッフであることを忘れず、活動するように心がけている。2つ目は集団であるがゆえに1人の生徒につきっきりになったり、1人だけに注意を向け続けたりすることが難しさだ。1人1人に丁寧に関わりたいと思っても、全体を見て動かなければならないこともあり、話の途中で1人で過ごす他の生徒に声をかけに行きたくなる場面もある。その時に今話している生徒とどう伝えて区切りをつけるか、今から話をしに行く生徒にどのような声掛けから入るかというのは、その生徒ごとにもその時のスタッフの配置や場面の流れにもよるので、悩ましいことが多い。短くてもタイミングをみて「あなたを気にかけている」というサインを出し続けること、そのときの生徒の空気感を見ながら話をしていくことを大切にしている。もちろん1人でいたい生徒は1人で居させるが、目配り気配りをするのは忘れてはいけないため、可能な範囲でスタッフ間の情報共有を行う場合もある。3つ目は情報共有の大切さである。現在の本活動には主に生徒に関わるスタッフが自然と決まっている生徒もいる。生徒の状態や気になること、心配なことについて情報を共有することで、スタッフ全員が生徒達に関わる際に気をつけるべきポイントを把握でき、もしスタッフの誰かが休んでも他のスタッフが対応しやすくなる。これは引継ぎの際も同様であり、引き継ぐスタッフは長く見てきたからこそ生徒や本活動の空間の変化・経過を知ることができる。そのため、生徒たちの短期的・長期的な状態や変化を共有することは重要だ。あと半年の活動で生徒達の成長を見守り、私自身も一緒に成長していきたい。

Ⅲ コミュニティ心理学・地域援助の視点からの考察

次に、本教室の活動についてコミュニティ心理学・地域援助の観点から特徴ごとに考察する。

Ⅲ-1 学校内で行うことに関する考察

学校の中で行われていることについて以下の4点の特徴から考察する。

1点目は様々な立場からの関わりが可能になることについてだ。姫島(2016)は、地域からも大学院生や非専門家のボランティアスタッフが参加していることを本教室の特徴の1つとして挙げ、年齢も立場も異なるスタッフがそれぞれの持ち味を生かしながら生徒に関わることで、生徒の多様な経験を提供でき、さらにスタッフが互いの持ち味を理解することでそれぞれの得意不得意を補い合うような関係性が生みやすくなったと述べている。現在の活動では、学生スタッフとC氏が基本的に参加しているが、卒業生が来たり、担任等の教職員が来たりすることもある。それぞれの属性として、まず大学生・大学院生スタッフは生徒個人に合わせた関わり方を行う。加えて年齢も近いため生徒にとって話しやすい存在や将来像としての役割も果たしているようである。学生スタッフの関わりについて、藤岡(2011)では、①気にかけても気にかけるすぎない、②発言や表現を拾う、③役割をお願いする、④生徒同士のやり取りをつなぐ、⑤人との関係の中で遊ぶ、の5点に整理している。年齢が近く話しかけやすい存在としてだけでなく、生徒同士を繋ぐコーディネーター(姫島, 2016)や、見守る大人(木南, 2005)としての役割も果たしている。また、卒業生は、生徒と一緒に遊ぶ中で関係性を深め、生徒が受験を考えている高校について聞く場面がある。加えて、卒業生は生徒にとって卒業後の具体的なモデルとしての機能を果たしているようである。また教職員は、不登校状態になった生徒とその保護者に、本教室を紹介するという重要な役割を担っており、生徒にあわせた対応がなされている。また、担任によっても異なるが、生徒の学習面や進路面でのサポートや情報提供を行なっている。校内で適応指導教室が行われることで、担任が生徒の変化ぶりを目にするのができ、不登校生徒に対して担任が感じる焦りを軽減し、余裕を持って生徒の教室復帰を見守る(木南, 2005)ことにもつながると指摘されている。担任とは異なる立場の、スタッフが書いた記録を通じて、担任が多角的な視点から生徒の様子を把握できることが、担任の焦りの軽減や生徒の変化の見守りにもつながるだろう。このように生徒にとって様々な関係性の他者が活動に参加することで、それぞれの生徒に合わせた関わりや活動への参加が可能となっている。

2点目は安全性の確保ができることについてだ。何かトラブルが起こった際に、スタッフや教職員、保護者等の大人が多くいる場であるため対応しやすく、安全を確保できる環境である。

3点目は、生徒が本活動に通う選択肢を選びやすく、次のステップにも進みやすいことについてだ。適応指導教室は、通常、学校外に設置されており、生徒の生活の場から離れているため、子どもがうまくつながらないことも多い(姫島, 2016)。一方で、校内適応指導教室は、学校との関係を切らない、維持する、育む(田嶋, 2005a)ことができる点が利点として挙げられている。そのため、学校の中で生徒自身が、所属学級に行ったり、本教室に通い続けたりなどを選ぶことができる。本活動が、学校内で実施されることで、学級に行きづらさを感じた生徒が、本活動につながりやすくと考えられる。また、校内適応指導教室では、いったん学校そのものから切り離されることがないため、復帰にあたって多大で余分なエネルギーを必要としない(木

南, 2005)。本教室の設立当時から、所属学級へ通うハードルが指摘されている(姫島, 2016)。このことから、本教室から所属教室へ通い始める生徒が多くはなかったことが窺われ、現在の活動の中でもそのような生徒は少ない。だが、現在本活動に参加した生徒が、卒業後に通常級に進学することは少なくない。このことから、本活動を通じて、同年代の他者と関わる力が育まれていることが推察される。また、夜間と昼間の活動を生徒の希望に合わせて活用できることも利点の一つである。

4点目は、学校内に居場所がある感覚を育めることについてだ。本教室は、学校の中で自由に過ごせる場として存在しており、始業式や終業式などの行事も行われる。このことが、生徒にとって学校に通えていなくても放っておかれているわけではないといった、生徒に学校内での居場所がある感覚を維持することにつながるのではないだろうか。また、生徒自身は学校に来られていなくても、本教室や親の会のなかで話された情報が、保護者を通じて生徒に伝わることもある。このことにより、通えていない子でも取り残されている感覚を減らせることにつながるのではないかと考えられる。

Ⅲ-2 夜間に実施していることに関する考察

夜間に適応指導教室を行うことに関して、まずは利点について以下の2点から考察を行う。

1点目は、生徒が参加しやすいということについてだ。夜に活動を行うことで、実際に昼間は他の生徒の目を気にして登校できなかった生徒が、夜間にあることで安心して登校できていたようである(姫島, 2016)。現在も、生徒によって裏門から出入りするなど、人目を避けて学校に通うこともできている様子がみられている。

2点目は、卒業生や保護者が参加しやすいことについてだ。前述の通り、卒業生は生徒にとって進路の具体的な情報を得られるだけでなく、具体的な将来像としても機能している。だが、卒業生の多くが高校など、通学やアルバイト等の関係で昼間の参加が難しい。そんな中、夜間に行われる本教室は、卒業生が来やすい時間帯であり、また不定期であっても卒業生が継続して来ている例が現在は多い。そのため、本活動は、卒業生にとっても帰ってこられる居場所の1つとして機能していると考えられる。また、保護者も日中は仕事をしており参加が難しいことが推測されるが、本教室同様に親の会も夜間に実施されるため参加がしやすくなっていると考えられる。

Ⅲ-3 親の会についての考察

夜間の活動と同じ時間に行われている親の会についても以下の2点から考察を行う。

1点目は、保護者の自助グループとしての側面についてだ。不登校児の親の会は、当事者が主体的に立ち上げ、運営している自助グループとしての親の会と、クリニックや相談機関のスタッフが立ち上げたり運営に関わったりしている親の会の2種類に分類できるとされている(植村ほか, 2017)。B中学校での親の会は、設立当初から保護者同士がやりとりをする場として設立・機能しており、田嶋先生やC氏から伺った活動の様子等から、B中学校での親の会は前者の自助グループに近い親の会といえるだろう。田嶋先生によると、親の会に参加する保護者は徐々に学校への不満を話すようになっていった。不登校児童

生徒の保護者も、生徒と同様に孤立しやすい立場だろう。そんな中、保護者同士で励ましあったり、子どもの将来に対する不安を共有したり、時に学校への不満や要望を口にしたりする機会があることで、保護者同士がお互いに支え合い、力を取り戻していく場として、本活動の親の会は機能していると考えられる。

2点目は、保護者を通じて生徒がつながるという点についてだ。現在、夜間の教室に所属はしているが、生徒は参加せず、保護者のみ親の会に参加している例もある。そのような事例では、保護者が親の会に参加することが、親の会で話されたことや夜間の教室活動に関する情報を、生徒が知る機会となる。これまでも保護者を介して生徒が夜間の活動について知り、参加する例もある。したがって、保護者だけで参加することにも、重要な意味があるといえるだろう。

Ⅲ-4 現在の本活動における課題

ここまでB中学校における夜間適応指導教室や昼間の活動、親の会に関して様々な面から考察したが、現在の本活動における課題も2点挙げられる。

1点目は、夜間に行うことによる教職員の負担増加についてだ。姫島(2016)でも同様の指摘があり設立当初からの課題である。現在、本教室の活動が完全に終了するのは21:00頃である。姫島(2016)はこの課題に対して、本教室の活動が不登校生徒への介入方法として学校の発案により誕生したものであるため、学校全体として負担や責任を分担する視点から解決が行われるべきものと述べている。筆者は本報告執筆に際し、田嶋先生やC氏にお話を伺う中で、活動の裏に本教室への深い理解を示し、積極的に協力していた教職員の姿を垣間みた。本教室に関わる一員として、多大な協力をいただく教職員に、本教室の意義や必要性を感じてもらえるような活動を今後も行なっていくべきだろう。また、スタッフと教職員間での些細な会話を通じて関係性を作り、本教室活動に関心を持ってもらうことも協力を得る上で重要だと考えられる。

2点目は、他地域での活動の広がりづらさについてだ。C氏によると、本教室について知り、転勤した教職員が他地域の実施に積極的になるが、上手くいかない場合が多い。筆者はその背景として、学校・地域・心理の3方向からの協力が関係していると推測している。本教室の設立の際は、学校の面からの協力として当時の校長、地域の面からの協力としてC氏、心理の面からの協力として当時SCだった田嶋先生が携わった。しかしそれぞれの力ではできないことも限られており、活動を設立・維持できないのではないかと考えられる。加えて、地域住民の理解と協力も重要な点だろう。そのため、本教室のような活動を行う際には共通の問題意識をもった、異なる立場の仲間づくりが第一歩となると考えられる。

Ⅳ スタッフとして参加する大学院生にとっての意義の考察

3名の体験報告から、臨床心理学を学ぶ大学院生が参加する意義について考察を行う。体験報告の共通点として以下の2点が挙げられる。1点目は、3名とも不登校生徒と関わった経験がない中、不安感などを抱えながら本活動へ参加し始めることである。2点目は、場への慣れなさや関わり方や距離感など、初学者ゆえの困難に直面するが、それらの困難に対して先輩スタッフやGSVでの先生、一緒に活動に参加する学生スタッフに相談

しながら対応していることである。心理臨床家の職業的発達モデルを3段階に分けた、統合的発達モデル (IDM) (McNeillほか, 1992) では、修士に在籍している学生は段階1から段階2の間にあたる。この頃の初学者は不安を感じやすく、理論に頼りやすいことが指摘されているが、本活動では実際に現場に入り体験しながら学んでいくことで、理論的知識だけでなく、自身の感じていることを大切にしながら心理臨床の実践を行う下地を作ることに繋がっているのではないかと考えられる。また、そのような実践には対象者を傷つけてしまう危険性があると推察されるが、教職員や地域の方々、GSVの先生など様々な大人が関わることで、本活動に参加する生徒が安全な環境の中で、心理臨床における重要な学びが得られる機会となっていることが考えられる。また、相違点として3名のスタッフが直面する困難さがそれぞれ異なっていることが挙げられる。それはスタッフ自身の得意・不得意といった個人の要因だけでなく、関わった生徒が異なることによる要因も影響していることが考えられる。加えて実際の学校現場での活動や、教職員との会話・記録でのやり取りが、学校現場や多職種連携についての理解を深める上で重要な機能を果たすと考えられる。

V 今後の展望

このように、B中学校での夜間適応指導教室は、教職員や地域の方々など様々な方の活動に対する理解や多大なる協力があり、現在まで活動が続けられてきた。本活動が対象としている不登校とは、あくまで状態像に過ぎず、生徒毎に抱える課題は様々 (酒井, 2005) なことから、多様な支援が重要だと考えられる。本活動のように現場のニーズを汲み取り、引き出し、応える (田嶋, 2002) ことは心理職の重要な役割の1つだろう。福岡県では、自主夜間学級が3か所で実施されており (福岡県, 2022)、2022年春に福岡市で公立の夜間中学校が開校される (福岡市, 2022) など様々な活動が行われている。今後も、本活動が不登校生徒の居場所や、次のステップを踏み出す場として維持していくために、スタッフとしての活動を後輩に引き継いでいきたい。

Adaptation Guidance Classes in junior high school at night and what graduate students learn as staff

Kaisei KURIWAKI
Risa TAKENAMI
Natsuki UCHIYAMA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

The number of Non-Attendance Students have been increasing. Adaptation Guidance Classes were one of supports for such students. Most of these classes were held in places which were outside of schools in daytime. We participated in the class as staff, which had been held in junior high school at night. The class had several characteristics. In this report, we described the class in detail, and then we compared the past class with the present one. We referred prior documents and interviewed important people who had started the class. And then, we discussed the class in terms of community psychology and community supports. Considering that discussion, it could be said that the class had been supported from the side of education, clinical psychology and region. Furthermore, we reported what we had learned in the class respectively. From these reports, we learned about significant points which were related to clinical psychology toward experiences in the class.

Keywords: Adaptation Guidance Classes, community psychology, community supports

〈謝辞〉

貴重なお話をして下さった田嶋誠一先生とC氏、執筆に関して背中を押し、ご助力下さった金子周平先生、そして本教室の活動にご協力いただいている全ての方に感謝申し上げます。

文献

- 酒井律子 (2005). 不登校の子どもをもつ保護者へのアプローチ. 臨床心理学, 5 (1), 57-61.
- 植村勝彦・高島克子・箕口雅博・原裕視・久田満 (2017). よくわかるコミュニティ心理学 (第3版). ミネルヴァ書房.
- 大原尚馬 (2021). 居場所としての機能をもつ夜間校内適応指導教室の利用者ニーズ. 日本教育心理学会総会発表論文集, 63, 377.
- 田嶋誠一 (2002). 現場のニーズを汲み取る, 引き出す, 応える. 臨床心理学, 2 (1), 24-28.
- 田嶋誠一 (2005a). 不登校の心理臨床の基本的視点. 臨床心理学, 5 (1), 3-14.
- 田嶋誠一 (2005b). 夜間校内適応指導教室. 臨床心理学, 5 (1), 45.
- 藤岡美里 (2011). 適応指導教室入室時の変容のあり方と卒業後の適応との関連の検討-夜間適応指導教室卒業生の事例から. 日本心理臨床学会第30回発表資料.
- 姫島源太郎 (2016). 公立中学校における夜間適応指導教室-不登校生徒支援のシステム形成のひとつとして- (田嶋誠一編). 遠見書房.
- 福岡県 (2022). 自主夜間学級 (じしゅやかんがつきゅう) について-福岡県庁ホームページ. https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/yakan_gakkyu.html. 閲覧日: 2023年8月10日
- 福岡市 (2022). 福岡市公立夜間中学「福岡きぼう中学校」について. 福岡市. https://www.city.fukuoka.lg.jp/kyoiku-iinkai/k-seisaku/ed/yakan_chugaku.html. 閲覧日: 2023年8月10日
- 文部科学省 (2019). 「教育支援センター (適応指導教室) に関する実態調査」結果.
- 文部科学省 (2022). 令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf. 閲覧日: 2023年8月13日
- 木南千枝 (2005). 学校内適応指導教室としての別室登校の試み. 臨床心理学, 5 (1), 27-33.
- McNeill, B., Stoltenberg, C., & Romans, J. (1992). The Integrated Developmental Model of Supervision: Scale Development and Validation Procedures. *Professional Psychology: Research and Practice*, 23, 504-508.